

MUSEUM NEWS

秋田県立博物館ニュース



CONTENTS

- 01 表紙・目次
- 02 展示報告「美の交差点 博覧会とあきたの工芸」
- 03 展示報告「世界の昆虫展～世界は昆虫であふれている」
- 04 学芸ノート「湯沢風といえば、まなぐ風・・・？」
- 05 学芸ノート「ベンケイガイが欲しい！」
- 06 学芸ノート「石川真良～甲子園の土の生みの親」
- 07 活動報告 博物館ボランティア「アイリスの会」
活動報告 セカンドスクールの利用について
- 08 博物館の風景

新着収蔵資料紹介

「千秋公園八景・本丸晩秋」勝平得之

この版画は、昭和8年から5年かけて作成された、秋田市の千秋公園の四季を描いた8枚組の作品の内の1枚です。

千秋公園は、旧藩主佐竹氏の居城であった久保田城跡を改造したもので、明治35年に完成し、市民に親しまれています。

春には花見客で賑わう本丸跡も、秋が深まるにつれて訪れる人もまばらになっています。園内の木々からはしきりに紅葉が散り、うす日のなかにひっそりと建つ佐竹義堯公の銅像にも、晩秋のわびしさが漂っています。

企画展 美の交差点 の 博覧会と あきたの工芸

明治期から大正期にかけ、博覧会に挑戦した秋田の工芸品に焦点を当て、展示を開催しました。

開国後の明治期、近代化推進に大きな役割を果たした政策の一つに博覧会事業があります。展示では、秋田の工芸が海外博覧会に出展され数々の賞を受賞した記録や、博覧会を契機としたデザインの変容と市場の拡大の様子を、実際の工芸品と共に紹介しました。

期間中には、秋田の工芸品の新しい魅力を知ることができた、自分の住んでいる地域にかつてこんな職人がいたなんて初めて知ったなど、来館者の皆様から多くの反響をいただきました。

開催にあたり、県内外の多くの方から資料借用、調査など多大なご協力を賜りましたこと、この場をお借りして感謝申し上げます。
(工芸部門 斉藤洋子)

展示構成

第1章 万国博覧会と内国博覧会

際2章 能代春慶と温知図録

第3章 秋田の工芸、世界を目指す

第4章 秋田の工芸の今



展示導入部には、日本政府が初めて公式に参加したウィーン万国博覧会当時の様子を、原寸大サイズに引き伸ばしてパネル展示しました。実際の会場を歩いているかのような雰囲気。

能代春慶は、秋田県で初めて万国博覧会に出品された工芸品です。博覧会との接触を契機として、江戸時代に主に製作された直線的な形(左)が、明治期では曲線的な形に変化した様子を、キャラクターを使いながらわかりやすく紹介するよう心掛けました。

私が紹介しました!



実際の人の大きさはこのくらい

syachihoko!



博覧会に何度も挑戦した小田切家の茜染は、鹿角市には残されていません。約200 km離れた横手市に保管されていたものが、県内では唯一の資料です。小田切家の染め物は、地元でも知らない方が多く、大変喜んで頂きました。

明治10年第1回内国勲業博覧会で褒状を受賞した秋田落摺(左)が名古屋市東山動植物園に保管されていたのでお借りしました。作者は2代宮越精之進。その時の賞状を、現在5代目の宮越力氏が所蔵していました。2点を並べて展示したのは、今回が初めてです。



デザインがおしゃれで機能的!

第4章では、海外だけでなく様々な人々に親んでもらえる工芸品を目指し、挑戦を続ける秋田の工芸の今を紹介しました。





昆虫の種類は100万種以上に及び、地球上の生物種の過半を占めています。生物の多様性や生命の不思議さに触れ、自然環境への関心を高める機会として、本展では昆虫の化石、世界各国の昆虫、珍しい昆虫、昆虫の漢字、食用昆虫、バイオミメティクスなど、さまざまな角度から昆虫を取り上げました。夏休みの会場では親子で展示室をめぐる姿が目立ち、多くの方々にご来場いただきました。

(展示・資料チーム 新堀道生)



湯沢 凧といえば、まなぐ凧..?

風のある晴天の日は凧あげにもってこいです。凧あげは子どもだけでなく大人の遊びとしても人気があり、全国各地で特徴のある凧が作られています。

県内各地でも、さまざまな特徴のある凧が伝えられています。今回は湯沢凧について、湯沢凧同好会会長の小野育朗さん（昭和25年(1950)生）からお話をうかがいました。その一部を紹介します。

湯沢凧の特徴

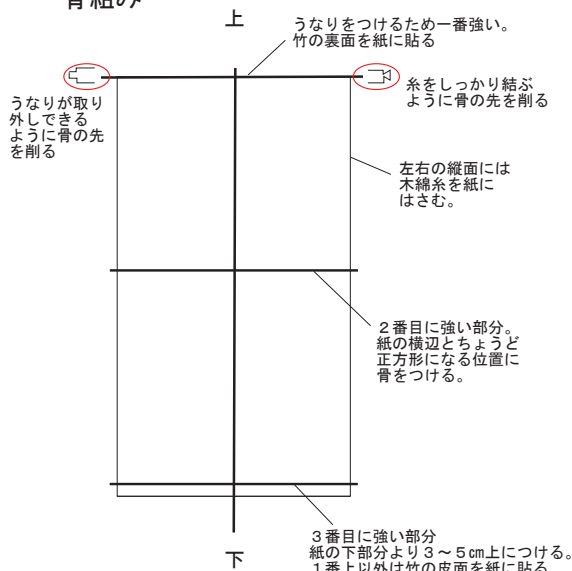
小野さんは小学校に入ってから凧作りをはじめました。湯沢では凧あげをするのは3月から4月と決まっており、雪が溶け始め、春を告げる暖かい風が吹き始めると凧あげのシーズンになります。

湯沢凧の特徴は、①凧の下に重りになるしっぽをつけないこと。②骨組みは縦1本、横3本が基本。③凧の縦中央に一直線に糸を張るのみ。④音が鳴る「うなり」という紙を上部につける。という、至極単純な作りではあるものの、骨組みにする竹の削り方が左右対称でないとうまくあがらず、いざ作るとなると巧みな技が必要になります。小野さん自身、60年近く凧作りを行っていますが、本当に満足のできる凧は1年に何枚も作れないといいます。

また、凧の骨組みを少なく、しっぽをつけないことで、さまざまな操作を行うことができるのも湯沢凧の特徴です。空中に止まっているようにあがることも良いですが、糸の引き具合によって「右回転」「左回転」「急降下」「急上昇」「木の葉落とし」といった技が伝えられています。

骨組みの竹は、以前は町内の桶屋からタガの端材をもらっていましたが、小野さんが18歳の頃から、8月に行われる「七夕絵どうろう」で使われた「カラ竹（根曲竹か?）」を使うようになりました。竹は十分に乾燥させます。そうしておくと、竹のはじき（反発力）が高まり、凧が空中で操作しやすくなるということでした。

骨組み



湯沢の凧はまなぐ凧?

湯沢凧といえば、墨一色で描かれた「まなぐ凧」を思い浮かべる人が多いでしょう。「まなぐ凧」は江戸時代後期に阿王兵馬という人物が考案したと伝えられています。まなぐ凧は角を生やし、大きな口を開けた鬼女の顔を描いたもので、下に「春風」という文字が書かれていることが特徴です。この凧は曇り空の時は丸顔に見え、晴天の時には四角く見えるそうで、魔除けの意味もあるとのことでした。しかしながら小野さんの話では、かつて凧屋を営んでいた家にはまなぐ凧の下絵があまりなかったそうです。むしろ、色鮮やかな「武者絵凧」や「歌舞伎絵凧」が主流で、墨一色のまなぐ凧は人目を引かなかったからでしょうか。また、まなぐ凧は左右対称に墨一色で描かなければいけないためにごまかしがきかず、これを描ける人は相当な絵心が必要になります。こうしたことも、普段凧屋の店頭に並ばなかった理由

かもしれません。

もともと湯沢の凧作りは、佐竹南家に仕える足軽の副業からはじまったといえます。湯沢市では昭和33年（1958）から凧揚げ大会が行われており、現在は3月第3日曜日に開催されています。年齢別に凧揚げの技を競いあうこの大会には、毎年県内外から大勢の参加者が訪れます。

湯沢凧同好会は、以前は50数名の会員がいたとのことですが、現在は9名、そのうち自分で作った凧をあげられる人は3人になってしまいました。技の継承が難しくなった昨今ですが、小野さんは小学校で凧作りの技を伝える教室を行い、子どもたちに凧作りの技を継承しています。自分で作った凧が大空にあがるとうれしいもので、その後も小野さんの家に凧作りを習いに来る子どもや父兄もいるそうです。

単純な作りである故にさまざまな操作が楽しめる湯沢凧。その魅力はまだまだ無限大にありそうです。



▲武者絵凧（小野育朗作）



▲まなぐ凧（小松利一郎作）

（民俗部門 丸谷仁美）

ベンケイガイが欲しい！

令和6年7月のある日、当館の考古ボランティアから「船越海岸が大変なことになっていますよ」との連絡を受け、男鹿市にある現地に駆けつけたところ、打ち上げられた多量のベンケイガイを目の当たりに、思わず小躍りしてしまいました。しかしこう書かれても一体何が大変なこと、何に喜んでいるのか、皆目見当のつかない方も多いかと思います。

ベンケイガイはタマキガイ科に属する二枚貝で、殻長は8cmほどと比較的大きく、名前からイメージされる通り貝殻は分厚く頑丈です。水深3～20mの、潮間帯より深い海の砂地に生息しており、暖流の影響を受ける北海道南部以南に分布するとされています。筆者がこの貝に注目する理由は、縄文人が腕にはめた装身具である「貝輪」の素材として使われていたからです。

縄文時代の貝輪素材はいくつかの種類が知られていますが、中でもベンケイガイは、後・晩期に急激に増加する貝輪の主要な素材となっています。能代市にある柏子所貝塚では、千点をこえるベンケイガイ製の貝輪とその製作途中のものが出土しており、貝輪が生産されていたことを示す貴重な例です。このような大量出土は、当時の社会における貝輪需要の高まりを示していると言えるでしょう。柏子所貝塚で作られた貝輪は、当地で消費されるにとどまらず、交易品として重要な位置を占めていたことも十分に想像できます。

当館の令和4年度の企画展「秋田の縄文遺産」では、貝輪を含めた柏子所貝塚出土骨角器を能代市から借用して展示し、これをきっかけに翌年から「貝輪をつくる」という博物館教室を開催しています。教室の実施にあたり最も懸念されたのが、素材となるベンケイガイの入手でした。ベンケイガイは海の深い場所に生息するため生きた貝を捕獲するのは難しく、死んで浜に打ち上げられた貝殻を拾うのが主な入手手段となります。男鹿半島近辺には打ち上げポイントがいくつか報告されていて、何度か訪れてはみたものの一度にたくさん拾えることはなかったため、教室を続けていくのに十分な量を確保できるか、担当者の心配はつきなかったのです。

船越海岸でのベンケイガイ多量打ち上げの光景は、そんな不安を一瞬で吹き飛ばしてくれました。サイズ調査も兼ねるため、貝輪製作に適さない小さなものまで片端から拾い尽くすのは一苦労でしたが、優に千個を超える量を確保でき、まずは一安心です。このときの海岸には流木や海藻など様々なものが漂着していましたが、そこには貝殻のみならず生きたベンケイガイも含まれていました。

貝製品研究の第一人者である忍澤成視氏は、日本各地の現生ベンケイガイ打ち上げポイントを報告しており、縄文人がこうしたベンケイガイの多量打ち上げを利用して効率的に貝輪素材を獲得した可能性を指摘しています。そして忍澤氏からは、こうした状況は短期間で消失してしまうおそれがあるため、定期的に観察し、記録するのが大事であるというアドバイスをいただきました。以来、なるべくこまめに船越海岸に訪れ、ベンケイガイの漂着状況を記録する調査を進めています。強い日差しに照りつけられながら、あるいは冷たい風に吹かれながら、重たい貝が入ったバケツ片手に浜辺を歩くのはなかなかの重労働です。しかしながら「ベンケイガイが欲しい」という想いを縄文人と共有できている気がして、何だか楽しいひとときでもあります。

参考文献：忍澤成視 2024「貝輪の考古学」新泉社

(考古部門 加藤竜)



▲船越海岸にて、様々な漂着物とともに打ち上げられたベンケイガイ



▲生きたベンケイガイにも出会うことができた



▲柏子所貝塚から出土したベンケイガイ製の貝輪と製作途中のもの。最初に殻頂部に穴を開け、腕が入る大きさまで徐々に広げ、最後に磨き上げるといった貝輪の製作工程がうかがえる。(能代市教育委員会所蔵)



▲柏子所貝塚から出土したアメーバ状砥石。貝輪の内側に当てて使うことで磨り減り、歪な形となっている。貝輪製作が磨き上げる仕上げの段階まで行われていたことを物語っている。(能代市教育委員会所蔵)

※令和7年2月より開催する企画展「秋田の宝 県指定文化財展」では、柏子所貝塚出土品を展示するとともに、同貝塚の県史跡指定70周年を記念して、忍澤氏による講演会の開催を予定しております。

いし かわ しん りょう

石川真良 ～甲子園の土の生みの親～

今年2024（令和6）年は、阪神甲子園球場が建設されて100年になります。甲子園球場の名前の由来は、^{じつかんじゅう}十干十^{にし}二支の組み合わせからきています。この組み合わせは60通りからなり、十干の最初の^{きのえ}甲と十二支の最初の^ね子^{きのえね}が組み合わさる1924（大正13）年の甲子の年は、60年に1度巡ってくる縁起の良い年とされ甲子園と命名されました。その甲子園球場の建設に尽力した一人が石川真良（1890～1969年）です。

石川は、若美町（現男鹿市）の生まれで、秋田中学（現秋田県立秋田高等学校）から慶應義塾大学に進学しました。学生時代に投手として活躍し、大学ではアメリカ遠征にも参加しています。1916（大正5）年に大阪市阪神電気鉄道株式会社に就職します。

石川は、「選手にとってより良い土を」と考え、淡路島の赤土や神戸の黒土など各地から集めた土を混ぜ合わせたサンプルを作り、ローラーのかけ方まで工夫し、固さ・粘り・色などを研究しました。また、自らユニフォーム姿で滑り込みを繰り返しては記録を取り、土の調合を重ねました。当時の球場建設の設計主任で、のちに阪神電気鉄道の社長も務めた野田誠三は、「一人で転げ回っているから、球場建設に携わっていた大林組の人たちは不思議がっていた」と回想しています。

甲子園球場の建設工事は、1924（大正13）年3月11日に着工し、同年の7月31日に完成します。完成した当時は、甲子園大運動場と呼ばれていました。新しく完成した球場で、第10回全国中等学校優勝野球大会（現全国高等学校野球選手権大会）が開催されました。この大会には、石川の母校である秋田中学が出場しています。石川もさぞ万感胸に迫るものがあったことでしょう。

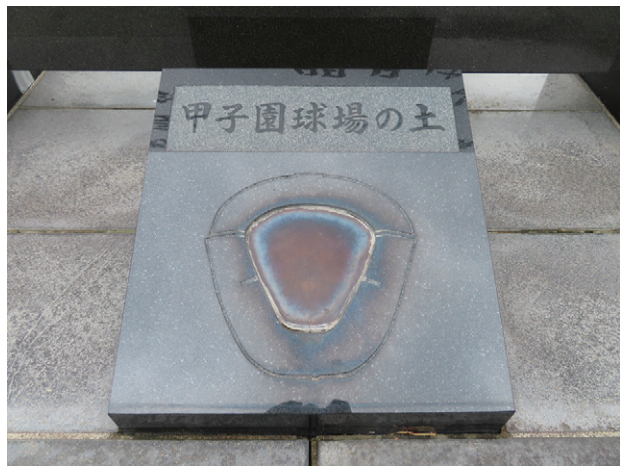
1926（大正15）年に阪神電気鉄道を退社した後は、専修大学野球部の初代監督に就任しました。戦後、1950（昭和25）年には、生まれ故郷の若美町立^{ふつと}弘戸中学校の事務職員として勤務し、野球部の指導にあたりました。

1999（平成11）年10月には、石川を慕う人たちや教え子を中心とした「石川先生をたたえる会」により、若美中央公園野球場に「野球人 石川真良先生 記念碑」が建てられました。記念碑に刻まれた「今日はきのうより、明日は今日より」は、石川が著した「野球十訓」の一つです。石碑の前には、秋田高校の野球部員が持ち帰った甲子園球場の土も埋められています。

（民俗部門 深浦真人）



「野球人 石川真良先生 記念碑」



甲子園球場の土

活動報告

博物館ボランティア 「アイリスの会」

博物館ボランティア「アイリスの会」は博物館を愛好する方々の集まりで、41名の会員は年齢を問わず相互の親睦を深め合いながらボランティア活動に取り組んでいます。

会が発足したのは平成12年で、当初は展示解説を中心に活動をスタートし、平成16年のリニューアルオープンを機に「わくわくたんけん室」での体験活動のサポートや館内図書の整理などへと活動内容を改めました。現在ではさらに博物館教室のサポートなども含め全部で5つのチーム編成により楽しく学びながら活動しています。

令和3年には長年にわたる社会福祉推進への功績（ボランティア功労）が認められ、厚生労働大臣から表彰されました。

会員の皆さんはそれぞれの持ち味を生かしながら博物館の良きパートナーとしてボランティア活動に取り組んでいますので、館内で活動しているところを見かけましたらお気軽に声をおかけください。
（普及・広報チーム 藤原尚彦）

—— チーム編成と主な活動 ——

〈お話チーム〉

わくわくたんけん室での読み聞かせ「おはなし会」の開催（写真①）や講演会などでの受付

〈織チーム〉

わくわくたんけん室でのイベント「裂き織り体験」（写真②）や「簡易機織りストラップ作り」の開催

〈図書・広報チーム〉

館内の図書整理（写真③）や会員通信の発行、会員の研修会の企画

〈藁チーム〉

博物館教室や学校団体利用などでの藁細工体験活動のサポート（写真④）

〈藍チーム〉

博物館教室や学校団体利用などでの藍の絞り染め体験活動のサポート（写真⑤）



活動報告

セカンドスクールの 利用について

秋田県内の各教育施設では、幼稚園・保育園等の未就学児から高校生までを対象としたセカンドスクールの利用（学校団体による校外学習）を行っています。秋田県立博物館でも、毎年たくさんの学校にご利用いただいております。館内の各展示室や旧奈良家住宅がそのまま教室となり、見学や体験活動を通して郷土の自然や文化に触れる体験をしていただくことができます。資料をじっくりと観察していただけるのはもちろんのこと、一部は実物に触れることも可能です。

見学中の子どもたちの楽しそうな様子を見ると、我々博物館職員も嬉しくなります。オリエンテーションの際に「展示の中から何かひとつお気に入りを見つけてね」と呼びかけているのですが、お帰りの際に「〇〇が良かった!」と報告してもらえることがあります。中には博物館のリーダーになってくれる子どもたちもいて、校外学習で学んだ内容をご家族に誇らしげに説明している様子を見かけることも。博物館が子どもたちの様々な興味・関心を広げるきっかけになれば幸いです。

（学習振興チーム 千田育栄）



博物館教室



「化石と地層の観察会」

男鹿市安田海岸で地層観察を通して大地の成り立ちを学びました。また、現地で採集した貝化石を使って標本作りについて学びました。



「真澄に学ぶ講読会」

江戸時代の紀行家菅江真澄がのこした日記のうち県外に関するものを取り上げ、日記の概要を確認し、主要内容などを声に出して原文を読みました。



「秋田の歴史教室」

初心者向けの講座として、鎌倉時代の史料を教材として取り上げ、史料の解説とその内容について学ぶ講義を行いました。



「秋田の絞り染め」

秋田県で行われた伝統的な絞り染めの技術を学ぶ教室です。絞り方によって3つのコースに分かれ、参加者が協力して木綿の浴衣地一反分を藍で染めました。



「からむしを績む」

からむしはイラクサ科の多年草で、皮から繊維を取り出す苧(お)引きと呼ばれる作業を行い、繊維から糸を績んで布を織ります。



「貝輪をつくる」

柏子所貝塚で出土した貝輪について学び、実際に貝輪を製作して縄文時代のアクセサリーやものづくりについての理解を深めました。



「土器作り教室」

縄文土器の実物を観察しながら土器の作り方を学び、陶芸用粘土を使って成形して、野焼きで焼き上げました。

イベント・行事



「『軒の山吹』再現」

菅江真澄が記録した、家の軒先に山吹の花を飾る金足地区に伝わる行事を分館旧奈良家住宅に再現しました。



「教員のための博物館の日」

学校の教員に博物館の魅力を説明し、博物館を活用した取り組みを学校教育のプログラムに設定していただくことを目的として実施しました。



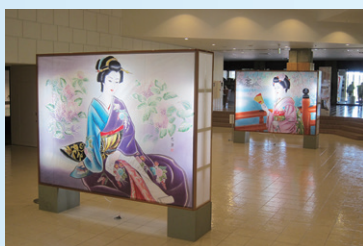
「ロビーコンサート」

普段はロビーに展示されている、製造から100年を迎えたピアノを使用して、トリオドルチェの皆さんをお迎えしてコンサートを行いました。



「おはなし会」

毎月最終日曜日に博物館ボランティア「アイリスの会」のメンバーが大型絵本や組木絵本、秋田にまつわるお話などの読み聞かせを行っています。



「絵どうろう」

湯沢の絵どうろうは美人画を題材としたものがよく知られていますが、昔話の題材や七福神などのめでたい絵柄も好んで描かれました。



「樺細工のストラップづくり」

企画展「美の交差点」のイベントとして、角館で明治9年から続く八柳商店にご協力いただき樺細工のストラップづくりを体験してもらいました。